

プロセスプランニング手法による住民参加の公園づくりに関する研究

九州大学大学院 学生会員 ○古賀貴典 下関市立大学 正会員 坂本紘二
九州大学大学院 正会員 外井哲志 (株)緑景 非会員 武林晃司

1. はじめに

まちづくりや公園整備等において、住民参加による計画づくりにワークショップ(以下、WS)が昨今盛んに実施されるようになった¹⁾。参加者の意見の共有や合意形成の促進、参加意欲の醸成²⁾³⁾、行政や専門家の意識変容⁴⁾などにおいてWSは有用である。

福岡市南区の長丘中公園では、基本構想から工事施工に到るまで住民参加のWSを重ね、実際に利用しながら住民たちの意向に沿って進めていく非決定のプロセスプランニングの手法が採られた。本研究は、長丘中公園WSをもとに、プロセスプランニング手法の有効性を示すことと住民参加WSを進めていく上での課題の明確化を目的としている。

2. 公園の概要とWSの経過

長丘中公園は、公園部分(10,700m²の近隣公園)と市楽池(5,200m²の洪水調整池)から成る。1989年に市楽池を「運動場兼治水池」とする整備案が作成されたが、自然保護を唱える住民からの反対に遭って白紙に戻され、その後長年の懸案事項となっていた。そして、1997年に福岡市地域づくり推進事業により、住民参加による公園づくりWSが開催された。長丘中公園WSでは、これまでの6年間、6ラウンド、延べ回数にして20回を超えるWSが行われた。詳細は表-1のとおりである。

実施設計を定める第4ラウンドの3回目のWS(以下「4-3WS」のように記す)で、今回の工事の進め方は、まず2年で基盤整備を行い、さらに必要な施設類についてはWSを重ねながら工事

内容を定めることが決定された。長丘中公園の最終的な計画平面図は図-1のとおりである。

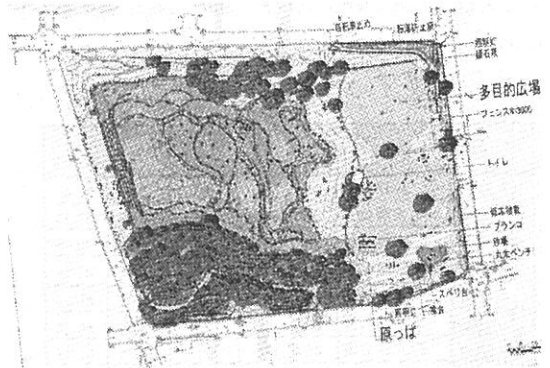


図-1 長丘中公園計画平面図

3. 長期に及ぶWSによる効果

(1) 参加住民と行政担当者の意識変容

1-2WSまでは、「幼稚に見えるWS手法への不満」や「既に案ができていてという疑い」等から、一部の参加者から進め方に対する不満の表明が続いていた。経過等を率直に説明し、参加者の合意による案の策定である

表-1 長丘中公園WSの経緯

ワークショップと目標	開催時期	回数	概要	主な内容
1. 基本構想のプランづくり	1997.1 ~1998.1	第1回	現地調査	参加者のほとんどがWSに対する疑いを持っていた。一部の参加者から進め方に対する不満が出る。
		第2回	基本方針、基本イメージの検討	
		第3回	3つのたたき台をもとに検討	3つのたたき台に対する反対意見が多く出され、事務局と参加者の議論となる。
		第4回	最終案の確認、今後の課題の整理	参加者同士の話し合いにはならなかったが、案に入れて次期で了解を得る。住民グループ「かたろうかり」が結成される。市の職員がオブザーバーとして参加する。
2. 基本設計をまとめる	1999.4 ~1999.8	第1回	基本計画の確認、変更案の検討	動植物調査、測量の結果を情報として提供する。
		第2回	具体的なイメージの検討	参加者に整備イメージ、整備手法等について検討してもらい、市の職員もWSに参加する。
		第3回	たたき台をもとに検討	安全対策、水質等(堀、井戸)で住民と行政の意見が食い違つ、トイレの設置で意見が分かれる。この頃から参加者同士の議論になる。また、ある項目に反対するために参加する住民が見れる。
		第4回	細部の検討、最終案の確認	「野鳥観察小屋を兼ねた公園」でトイレの設置が決定する。参加者がWSに慣れて、人の意見を聞き、相互に折り合う姿勢が見られるようになる。
3. 池の工事チェックと参加	1999.11 ~2000.3	第1回	実施設計説明	池部分の造成工事、表土保全のポイント。
		第2回	工事説明会、貴重種の移植	貴重な植物等(ツクシオカサツリ、タツボシメシ、フクリンドウ)の移植を業者と住民と一緒に行う。
		第3回	貴重種の移植	プランターに仮植していたものを植栽する。表土保全の効果あり(違う植物が出てきた)。工事後約6ヶ月でもとのような池に戻る。
4. 施設等実施設計案づくり	2000.7 ~2001.3	第1回	子供ワークショップ	主に広場の作り方が問題となる。子供の代表から「池の安全性」「フェンスの設置」を訴える意見が出された。子供の意見も「原っぱ案」とフェンスで囲まれた「ランド案」に分かれた。
		第2回	基本設計の見直し検討	町内会役員が参加しなくなり、「中公園かたろう会」を中心に参加者が固執し始める。その反面、特定の項目に反対するためだけに参加する住民が多くなる。(フェンスの代替として)ネットの設置、木製遊具、手作り遊具等の公園施設が具体化してくる。
		第3回	たたき台をもとに検討、細部の検討	思いながら施設を除くか否かに懸えて行く長期整備の提案。
		第4回	最終案の確認	詳細設計における対応案のほとんどが「様子を見る」で合意する。
		第5回	実施設計説明会	フェンスは「目立たないデザイン」とし、了承を得る。
		第6回	工事説明会、貴重種移植	石積みの高さや積み方等で「イメージと違う」という意見がある。工事中に参加者を交えて現場での協議を行う。植栽追加などで対応。手廻し工事がスムーズに進行。
		第7回	貴重種移植	市楽池及びその周辺の工事が完了する。
5. 工事後の第1回	2001.9 ~2002.3	第1回	工事が終わっての反省	レギュラーメンバーのみの参加。工事担当者も反省会に参加。
		第2回	工事説明会、貴重種移植	様々な要望のうち一部を今年度工事に反映し、その他は様子を見ることにする。
		第3回	しがら組	人の侵入で荒れた西の森をきれいにするためしがら組を組む。材料は工事費に入れ、参加者が労力を提供する。
6. 工事後の第2回	2002.6~	第1回	手廻し工事の説明	
		第2回	工事が終わっての反省	

ことに理解を求め、互いに少しずつ慣れてきた。参加者同士で本音の意見が飛び交うようになったのは、2-3WSあたりからである。

また、進行の過程で、参加者も微妙に変化している。4-2WSから町内会役員の参加が減り、住民グループ「かたろう会」を中心に参加者が固定し始めた。これは、対立を生んでいた調整池に関する議論が一段落したためでもあった。また、トイレ設置(2-3WS)やフェンス設置(4-2WS)に反対するためだけに参加する住民も現れたが、参加者同士それまでの過程を踏まえての粘り強い議論ができるようになっていた。

1-4WSから公園建設課がオブザーバーとして参加した。2-2WSから河川建設課も加わり、WSのテーブルの中に入ってもらい立場を同じにした。それによって関係がほぐれ相互の率直な意見交換が可能になり、時に、「安全対策」等の専門的な課題の際には専門家としての役割からの情報や見解を提供するようになった。

(2) 対立点の克服

2-3WSのトイレの設置に関して、「臭い」「ホームレスや不良の溜まり場になる」といった感情的な意見が出て当初は反対が大多数だった。議論をしていくうちに変化が見られたが賛成と反対は半々に分かれ、そのまま期間をおくことにした。約一ヶ月後の2-4WSでは、事務局が「人間の生理から考えたトイレの必要性」の報告などを行った結果、設置賛成が増えた。その段階で模型を囲んでの意見交換の場で「野鳥観察小屋を兼ねたトイレ」の提案が出て、それによって設置場所も含めての合意が得られた。

フェンスについては、基本設計では既存のものを取り払った自由な「原っぱ」にすることになっていた。第4ラウンドでは、それまでWSに参加していなかった子供会の代表等から「フェンスの設置」を訴える意見が出された。しかし、長期整備の提案もあり、片側の部分的な目立たないデザインのフェンス設置で様子を見ながら整備を進める案で合意している。

4. 進行上の課題

(1) 情報の伝達

2-1WSでは、動植物調査や測定の結果を情報として参加者に提供しているが、専門家よりも普段利用している住民の方が利用の具合や季節の変化等に関する情報を持っているので、逆にそれらを引き出すプログラムがあればより充実した内容の議論に結びつくと考えられる。

次に、行政内部の情報伝達にも問題があった。基本計画では残す方針だった森の木が一部伐採される事件が起きた。WSに参加しなかった町内役員の要望に市の公園管理の部署が応じたためだった。住民の反対で伐採は中断され大事には至らなかったが、情報伝達がうまくできていれば防ぐことができた事態である。

(2) WSの認知

WSにおける最大の課題として、WSをスムーズに進行させる手立てが十分でないことが挙げられる。費用面では維持管理などは一部住民が負担しているのが現状である。必要に応じて迅速に対応できる体制の確立と、WSをルール化して行政内部はもとより、社会的に広く認知を得る必要がある。

5. おわりに

本WSの経過を通して、市民参加による施設整備における参加者同士の合意形成には、ある場合には決定を急がないで時間を置きながら進めることが必要なこと、各WSで場面に応じうる柔軟な対応が求められること、および、余裕のある進行管理への行政内部のシステム転換が必要であることなどが明らかになった。

プロセスを含んだ整備の進捗は、公園としての機能を十分に発揮して、親密感の濃い利用度の高い公共の場を形成するに違いない。長丘中公園再整備の進め方は、そのような持続性のあるこれからの公共空間の整備に必要とされる計画手法と技術の展開が示されている。長丘中公園WSは今年の10月をもって一応終了したが、公園の維持管理や運用面に関わるようになる住民意識の生成など、今後の推移をなお見守っていききたい。ことになった。公園の維持管理や運用面に関わるようになる住民意識の生成など、今後の推移をなお見守っていききたい。

参考文献

- 1)建設省関東地方建設局国営昭和記念公園工事事務所監修・公園緑地管理財団編『「協働」による公園づくり読本-住民と共に考える公園づくり-』大蔵省印刷局、(2000.5)
- 2)奥儀・坂本・辰巳・古川・浜田「住民参加型公園づくりにおけるワークショップの有用性」土木学会西部支部研究発表会(2000.3) pp.764
- 3)宮本・道上・喜多・檜谷「河川整備計画の策定における住民参加に関する一提案」土木計画学研究・講演集No.23(1)(2000.11) pp.39-42
- 4)村田・延藤「参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察-ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定(柳井市)を事例として-」2000年度第35回日本都市計画学会学術論文集 pp.841-846
- 5)坂本・外井・武林「住民参加の公園づくりについて-ワークショップによるプロセスプランニングの事例として-」土木学会西部支部研究発表会(2001.3) pp.B252-253
- 6)古賀・坂本・外井・武林「住民参加の公園づくりについて-ワークショップによるプロセスプランニングの事例として-」2002年度第26回土木計画学研究発表会(秋大会)